THE DAILY NEWS
KOBE 2024 PARA ATHLETICS WORLD CHAMPIONSHIPS
Thu 23 May
DAY 7
Japanese

Yesterday's Highlight

もっと遠くへ。跳躍と投てきのドラマ

大会も後半戦に入った6日目は、青空に涼風が吹く日本の5月らしい天候のなかでの競技となった。世界記録はなかったが、大会記録やエリア記録は複数更新された。フィールド種目では注目の選手が多数出場し、イブニングセッションの最後まで熱い声援がスタジアムにこだました。

■F46女子砲丸投げ

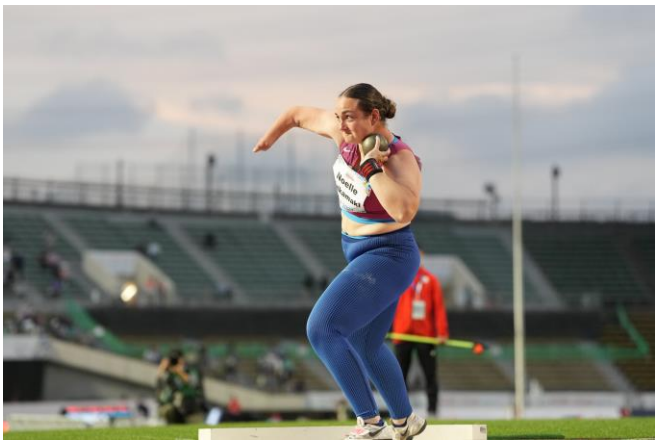
腕に障がいのあるF46クラスの女子砲丸投げは、パリパラリンピックで2008年北京大会以来4大会ぶりに復活、実施されることが決まっている注目の種目だ。その前哨戦となる今大会の決勝にも、世界ランキング上位者がほぼ顔を揃えたハイレベルな戦いが展開された。

優勝したのは前回覇者で世界記録保持者（13m32）のノエル・マルカマキ（アメリカ）。1投目に12m23をマークしてトップに立ち、4投目で13m12まで伸ばした。2位にはホーリー・ロビンソン（ニュージーランド）が12m25で、3位には日本の齋藤由希子が11m72で入り、世界ランクトップ3がそれぞれ存在感を放った。

2連覇を飾ったマルカマキは、「2年連続での世界タイトルを獲得できて最高の気分。アメリカ代表ユニフォームで試合に出場するのはいつも素晴らしい経験ですから」。満面の笑顔で優勝の喜びを話したが、王者の目指すところはもっと高みだ。

「昨年のパリ大会で樹立した世界新記録を更新したかったが、少し足りなかった。でも、金メダルは素晴らしい。帰国後、さらにトレーニングに励んで、世界記録更新はパリパラリンピックで達成したいです」

健常の陸上競技で投てきを専門としてきたマルカマキだったが、コーチの勧めもあって約3年前からパラスポーツの大会にも出場しはじめ、一気に頂点まで上り詰めた。長期的には2028年ロサンゼルス大会出場を見据えるが、まずは今夏のパリ大会で新女王の称号を目指す。



2位のロビンソンはやり投げとの二刀流選手だが、今大会は前回パリ大会でも銀メダルだった砲丸投げに絞って出場した。狙い通り自己ベストを8cm伸ばし、オセアニア記録も更新。「すごく興奮しています。大舞台で自己ベストが出たので、とても嬉しい」

5投目を終えた時点では3位（11m51）だったが、最終投てきでビッグスローが飛び出し、2位に浮上。次に投げた齋藤は記録を伸ばせず、ロビンソンの2位が決定した。前回パリ大会でも2位だった。

「今日はずっと3位だったので、とても緊張していました。でも、最終投てきでは銀メダルを目指して、しっかり脚を使ってバーンと力を出し切ったら、いい投てきができた」と手応えを語った。今夏のパリパラリンピックでは、「やり投げと砲丸投げの2冠」を目指す。

ロビンソンに逆転され、前回パリ大会と同じ3位に終わった齋藤は、「純粋に悔しい。最終投てきで逆転され、それを逆転し返せなかったのは力不足」と唇をかんだ。2投目に今季ベストとなる11m72をマークしたが、大会前から不安があったという右脚の影響もあり、伸ばせなかった。

マルカマキに更新されるまで長くこの種目の世界記録保持者（12m47）だった齋藤は2022年に第一子の出産を経て本格的に競技に復帰した。「パリパラリンピックでメダル獲得という目標に向けて、もう一度体を作り、攻めていきたい」と前を見据えた。

この上位3人の顔ぶれは順位も含め、前回パリ大会と全く同じだ。次戦の舞台、パリパラリンピックでは誰が勝っても初となる。世界記録や自己記録の更新、逆転劇、はたまた別の選手が割って入るか。興味の尽きない戦いまで、もう100日を切っている。

■T64男子走り幅跳び

マルクス・レーム。ドイツ代表の走り幅跳びのスペシャリストで、パラスポーツ界屈指のスーパースターである。両ひざ下切断で義足を使用するクラス（T62）、片ひざ下切断で義足を使用するクラス（T64）、ひざ下の下肢機能障がいのクラス（T44）混合による走り幅跳びが18時21分にスタート。レームを含む、13名の選手が出場した。

レームは、2023年6月に8m72の跳躍で、自身が持つ世界記録を更新している。新たな世界新が誕生するのか。ユニバー競技場のメインスタンドには、歴史的瞬間を目撃するかもしれないと期待を抱いた、たくさんの観客が詰めかけていた。

レームの試技順は12番目だ。1本目、試技順3番目のジャンパー、アメリカのデレク・ロクシデントが7m05のビッグジャンプを見せると、スタンドから「おお～」というどよめきと歓声が響いた。レームは、１本目から観客の手拍子の中でジャンプし7m95でトップに立った。

前半3回の記録から後半8名に絞られる。前半トップのレームは最終の試技順となった。この後半でアメリカの2選手、レームと同じドイツのノア　ボデリア―が躍動した。アメリカのベテラン、トレンティン・メリルが第４試技で7m10を跳び２番手に立つも、20歳のボデリア―がメリルの記録を1cm超える7m11で、さらにロクシデントが7m28のジャンプを披露し、次々と7m台の交代劇を繰り広げた。その後、メリルが最終試技で7m35、ロクシデントが第５試技で7m69のアメリカ大陸新記録をマークして、レームの超人的ジャンプを追いかけた。

レームは４本目に7m86、５本目でこの日初めての8m超えとなる8m30を跳び、最終試技を迎えた。スタジアムのすべての視線が、レームに集中する。助走のカウントダウンが始まり、残り30秒のタイミングで、両手を挙げてスタンドに合図すると、待ちかねたように大きな手拍子が沸き起こった。残り15秒、助走を開始。加速、踏み切り、そして空中へ。砂場の外へ飛び出すかと思うほどの勢いで着地した。最終試技の記録は8m23。8m30の記録で今大会の優勝を決めた。2011年のクライストチャーチ大会初優勝以来、世界選手権での7連覇を達成した。

「7連覇はアメージング。今日は風を読むなど、調整は難しかったが、8m30の記録には満足しています」と、開口一番、喜びを語った。

レームにとっては、神戸2024世界パラ陸上が今季初の公式戦である。「日本に来る4日前にオーストラリアでエキシビションのような形で走り幅跳びをしたが、その時には1度も8mに届かず、目を覆いたくなったよ。世界選手権には、各国のトップ選手が集結する。自分のコンディションは万全とは言えなくても、神戸大会に出場することは、自分にとっては最優先事項の一つだった。僕が欠場すれば、誰かがタイトルを取ることになる。簡単に明け渡す気にはならない」。

2018年7月にレームは日本の大会に出場し、当時の世界記録（8m47）を樹立したことがある。日本は、レームのお気に入りの国の一つでもある。「今日もスタジアムに来ると、一緒に写真を撮ってほしいとか、以前撮った写真を見せてくれたりなど、たくさんの人に温かく迎えてもらったよ」。

今大会2位はアメリカのロクシデント、3位はメリル、4位にボデリア―という結果だった。「デレクは25歳、ノアは20歳。2人ともすごく成長して記録がどんどん近づいている。こうした記録が出ることで、大会は盛り上がるし、観戦する人たちも楽しめたのではないかと思う。それが、パラ陸上の魅力をいっそう、広めてくれると思う」。

人類初の9m超えを、レームが実現するかもしれない。
「体調、風を含めた気象条件、義足の調整と使い方、あらゆる要素がすべて整わなければ、前人未到の9mにはたどりつけない。でも、常にそれを求めて準備し、跳躍している」。

もっと遠くへ。レームのさらなる挑戦は、7連覇の神戸2024世界パラ陸上から続いていく。

なお、日本の又吉康十は5m57の記録で12位だった。

Competition Schedule and Results

GO KOBE 2024!

特別支援学校生が、大会を支える人たちをおもてなし

「どうぞ」「ありがとう」――9日間にわたる大会期間のちょうど折り返し日となった5月21日、大会を支えるボランティア「ANCHORS～アンカーズ」の控室にはコーヒーのいい香りと笑顔があふれていた。神戸市立青陽須磨支援学校高等部の生徒が挽きたての豆で入れたコーヒーをふるまい、大会を日々、支えるANCHOURSたちを「おもてなし」したのだーー。

これは、大会組織委員会が兵庫県内の特別支援学校に、「普段の学習のやりがいや将来的な社会参画のきっかけに」と参加を持ち掛けた「大会関係者へのおもてなし」プログラムの一つだ。特別支援学校は日頃から就労支援学習や生活学習の一環として各種サービスの提供や手作り製品の製作などを行っており、12校が賛同。競技会場内での喫茶や製菓の提供、選手への応援メッセージやお土産小物の製作、主要駅での清掃活動などに、各校の児童・生徒たちが参加した。

この12校のうちの1つが青陽須磨支援学校だ。この日の「コーヒーサービス」に参加した7名は職業コース3年生で、全員が就労支援学習の一環として喫茶サービス関連の検定の合格者たちだという。今大会での活動に向けては、事前に神戸市内の老舗、「萩原珈琲」による研修を受け、コーヒーミルやコーヒーメーカーといった機器の使い方から接客などを学び、その後も学校で数回練習。並行してパラスポーツやパラ陸上についても予習し、準備万端で臨んだという。前日20日には貴賓室でのコーヒーサービスも終えていた。

参加した生徒たちに話を聞くと、「最初は難しかったけど、『おいしかった』と言われて嬉しかった」「すごく楽しいです」「友だちと団結できました」などの感想が充実の笑顔とともに返ってきた。

また、コーヒーを楽しんだボランティアからは、「本格的な味でおいしかった」「疲れたときや寒いときに、温かいコーヒーはほっとできますね」といった感謝の声が聞かれた。

生徒たちの様子を見守っていた同校の沖隆寛教諭は、「最初は緊張感が見られましたが、学校で練習した以外の状況にも柔軟に対応していたり、友だちと声をかけあったり、『コーヒーメーカー、空だから入れるわ』と自ら率先して動いたり・・・。現場で想像以上に生徒たちが成長してくれて、感無量です」と手応えを語った。今回の活動で、「特別支援校の生徒たちにもこれだけのことができるのだということが広まって一般企業での障害者雇用枠の拡大などにもつながったら嬉しいです」と期待を寄せた。

兵庫県立西神戸高等特別支援学校は生徒たちが特製クッキーやビスケットなどを製造。大会期間中に競技場内の各所に配布され、関係者に喜ばれている。大会前に1日に約150～200枚を焼き上げ、せっせと袋に詰めて約1500個を完成させた。ラベルには製造に関わった生徒たちによる手書きのイラストもデザインされている。

1500個という数には当初、「本当にできるのか」と不安の声も聞かれたそうだが、生徒たちは1年間、調理実習を重ねて大会開幕に間に合わせた。なかには周囲から、「お菓子職人」と呼ばれるほど上達した生徒もいるそうだ。「おいしいと言われて、うれしかった」など、生徒たちは手応えややりがいを感じている様子だった。

2校の他にプログラムに参加したのは、神戸市立の市立盲学校、青陽灘高等支援学校、灘さくら支援学校、友生支援学校、いぶき明生支援学校の5校、兵庫県立の県立視覚特別支援学校、県立神戸聴覚特別支援学校、県立神戸特別支援学校、県立のじぎく特別支援学校・県立芦屋特別支援学校の5校。